

「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」報告

二〇一三年四月二日、中国国家博物館（北京市）から陳履生副館長らを招聘し、「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」を開催した。本研究集会は、共同利用共同研究拠点研究「日本史料の研究資源化」の特定共同研究海外史料領域、及び画像史料解析センター「東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析プロジェクト」による研究として行なわれた。当日の趣旨説明ならびに三報告をここに掲載する。本集会の実施にあたっては、画像史料解析センター共同研究員の黄榮光氏（中国科学院自然科学研究所）から多大なる御尽力をたまわったことを記して謝辞にかえたい。

（研究代表／須田 牧子）

## 『倭寇図巻』研究の現状と課題―趣旨説明にかえて

須田 牧子

本所所蔵『倭寇図巻』については、二〇一〇年に赤外線撮影による新たな文字の発見がなされて以来、急速に研究が進んだ。その成果は折々に報告してきたところではあるが、本日の国際研究集会に先立ち、まず現時点までの成果をまとめ、続く三報告が本プロジェクトのどのような流れの中に位置づけられるのかについても、簡単に言及しておくことにしたい。

### 一、赤外線撮影による文字の発見―『倭寇図巻』の性格の確定

『倭寇図巻』は倭寇を描いた唯一の絵画資料として珍重され、「倭寇」といえば、この『倭寇図巻』の倭寇像が引用されてきた。その状況は中国・韓国においても同様であり、前期倭寇・後期倭寇を問わず、東アジアの倭寇イメージは「倭寇図巻」によって形成されてきたと言っても過言ではない。しかしながら『倭寇図巻』それ自体には、図巻の性格を特定できるような文字は見出されていなかった。つまり『倭寇図巻』が明

軍と倭寇との合戦を描いているというのは、図柄からの解釈にすぎなかったのである。

この状況に劇的な変化をもたらしたのが、二〇一〇年五月に行われた赤外線撮影の成果である。発見された三つの文字―①「大明神捷海防天兵」②「肅清海」③「倭夷」④「弘治四年」―はそれぞれ、①描かれているのは明軍であること、②明軍が戦っている相手は倭寇であること、③時代は一六世紀半ば、後期倭寇の時代であることを示し、『倭寇図巻』が一六世紀半ばに倭寇と明軍が勝利したことを描いたものであることを証明した。

### 二、二つ目の倭寇図巻―『抗倭図巻』の発見

ところで『倭寇図巻』が、オリジナルではなく、江南の職業画家の手になる模本である可能性については早くから指摘がなされていた。すなわち原・倭寇図巻というべき作品があり、『倭寇図巻』はそこから派生

したものだといふのである。そうだとすれば、『倭寇図巻』と同様の図巻は多く作られていたはずであるが、従来そのようなものは知られていなかった。ところが近年、中国国家博物館が『抗倭図巻』と名付けられた、『倭寇図巻』そっくりの図巻を所蔵していることが判明し、二〇一〇年九月本所と中国国家博物館とで共同研究を開始することになった。これが本プロジェクトの始まりである。

『抗倭図巻』は、絹本着色、全長は約五九九センチ、前欠であるが、全長約五三〇センチの『倭寇図巻』より約七〇センチ近く長い。倭寇の上陸と掠奪、明軍の出撃と倭寇との合戦、そして明軍の勝利を描く画面構成は同じであるが、『倭寇図巻』には無い、倭寇の首や捕虜を連れた凱旋のシーンがある。岩の上で形勢を眺望する倭寇・掠奪する二人組の倭寇・勝利を告げる騎馬武者の姿など、図柄の趣向がよく似ている一方で、山や木の描き方・水の描き方など、画を構成する要素にかなりの相違があり、『倭寇図巻』と『抗倭図巻』を直線的な親子関係と見ることはできない。両図巻は、原・倭寇図巻からそれぞれ派生した、いわば親戚関係にあたるものと位置づけられる。明代後期には名作の贋作作りが流行し、とりわけ『清明上河図』など都市社会を描いた、わかりやすい世俗的な絵画が流行した。両図巻はこうした文化的動向のもと、おそらく江南の工房で描かれた作品であり、明末の出版文化の隆盛のなかで幅広い階層が書籍を持ち出すという動向とも連動するのではないかと考えられる。

それでは両図巻のもとになった、原・倭寇図巻とは、どのような作品であったのだろうか。それを考える手がかりとなるのが、赤外線撮影で見出された二つの年号である。すなわち、『倭寇図巻』の冒頭には「弘治四年」という年号が、『抗倭図巻』の冒頭には「日本弘治三年」という年号が書き込まれている。日本弘治三年は一五五七年、弘治四年は一

五五八年。この年号で思い出されるのは、これが倭寇王と呼ばれた王直の捕縛に絡む年であることである。王直が中国側の招撫に応じて帰国したのが弘治三年、王直が獄に下され、同行してきた大友氏使者が明軍と合戦の上、逃亡したのは弘治四年のことであった。王直の捕縛は、浙直総督胡宗憲の功績として大いに宣伝され、これを境にいわゆる「嘉靖大倭寇」（一五五〇年代に主に浙江沿海部で展開された激しい襲撃・掠奪活動）は終焉に向かったという認識をも醸成することになった。弘治三年・四年はいわば「嘉靖大倭寇」が鎮圧された象徴的な年なのであり、倭寇に対する明軍の勝利の物語にふさわしい年なのである。このように考えると、原・倭寇図巻は、特定の戦闘そのものを描いているというよりは、胡宗憲の王直退治を主軸とした「嘉靖大倭寇」に対する明軍の勝利を寿ぐ作品であったと想定しうるのではなかろうか。<sup>①</sup>

### 三、三つ目の倭寇図巻―「胡梅林平倭図巻」の紹介

こうした見解に修正を迫ったのが、二〇一一年一二月の国際研究集会で馬雅貞氏によって紹介された「文徵明画平倭図記」である。詳細は『東京大学史料編纂所紀要』二三（二〇一三年三月）を参照されたいが、『胡梅林平倭図巻』という第三の倭寇図巻があったことを示す史料である。

「文徵明画平倭図記」は、清代の文人張鑑が、揚州阮氏文選樓所蔵『明文徵明画胡梅林平倭図巻』について記した解題である。張鑑の語るところによると、『胡梅林平倭図巻』とは、胡梅林こと胡宗憲の部下であった楊芷が、胡宗憲の求めに応じて文徵明の弟子に画かせた、丙辰（嘉靖三五年、一五五六）の乍浦梁莊の勝利を描いた作品である。高さ約四〇センチ、長さ約六七〇センチ、巻首に「靖海奇功」という四字、巻末には紀事（解説）一篇が書かれており、これらはみな「御史張賞」なる人物の手になるものであるといふ<sup>③</sup>。さらに張鑑はこの絵巻に描かれている

人物たちについて独自に名あてを試みている。馬雅貞氏の明らかにしたところによれば、この張鑑による凶中人物の考察は、『抗倭図巻』とよく一致し、両者は同一系統に属する作品と見なせるという。

嘉靖丙辰の乍浦梁莊の勝利とは、嘉靖三五年（一五五六）の胡宗憲による徐海とその一党退治を指す。この戦いで、徐海は自殺し一党の主だった人間は捕虜となった。『籌海図編』に「乍浦之捷」「紀剿徐海本末」として特筆される、胡宗憲にとって記念すべき勝利である。張鑑の語るところが正しいとすれば、続く山崎報告ではこの点に疑義が呈されることとなるが、これまで原・倭寇図巻の主題として想定してきた王直退治の物語とは、場所も年代も相手も異なることになる。さらに原・倭寇図巻は、「嘉靖大倭寇」に対する明軍の勝利を寿ぐなどという茫漠とした一般的な理由ではなく、明確に胡宗憲という特定の個人の功績を顕彰する戦勲図として作られたということにもなる。

この『胡梅林平倭図巻』に題・解説を付している張寰は、字を允清といい、正徳辛巳（一五二二）に進士となり、通政司参議に至った人物である。<sup>5</sup>つまり胡宗憲とは同時代人であるが、単に同じ時代を生きていたというだけでなく、胡宗憲と交遊関係にあったことが、彼の文集に収められた詩から判明する。<sup>6</sup>

「題石田湖山春曉図賀梅林司馬進秩」

春曉湖山万象新、風淳海宇不揚塵、虞廷偃武光前烈、商鼎調羹屬偉人、すなわち張寰は、胡宗憲の昇進祝として、沈周の絵に詩を付して贈ったことがあるのであり、胡宗憲の倭寇平定の戦勲図が作られた際に文を付すこともありえたかもしれない人物と言える。となると張鑑の見た、揚州阮氏文選樓所蔵の『胡梅林平倭図巻』は、原・倭寇図巻に極めて近い模本であるか、もしくは原・倭寇図巻そのものの可能性すらあることになる。

それでは『倭寇図巻』『抗倭図巻』『胡梅林平倭図巻』という三つの倭寇図巻の関係はどのようなものとして整理されるであろうか。

最初に確認しておかなければならないのは、『倭寇図巻』と『抗倭図巻』・『胡梅林平倭図巻』との距離である。馬雅貞氏の研究により、『文徵明画平倭図記』で張鑑が行っている『胡梅林平倭図巻』の人物比定は、『抗倭図巻』に描かれている人物と一致し、両絵巻が描かれている人物という意味では酷似した作品であることが明らかとなった。描かれている人物としては、海上合戦の場面においては俞大猷・丁僅、凱旋の場面では尹秉衡・盧鐘、城から出撃していく場面においては胡宗憲・趙文華・阮鶚・趙孔昭・郭仁・劉燾・徐汝・汪柏・王詢等の文官および武官の徐瑀の名がそれぞれ指摘されている。ところが『倭寇図巻』の海上合戦の場面には、俞大猷・丁僅に比定されるような指揮官が見当たらない。また『倭寇図巻』においては城から出撃していく明軍は、『抗倭図巻』よりもずっと長々と描かれるが、文官とみなせるのは一名にすぎない。一見きわめて似ている『抗倭図巻』と『倭寇図巻』の距離は意外に遠いことが再確認される。

一方、『胡梅林平倭図巻』と『抗倭図巻』においても、『胡梅林平倭図巻』に見られるとされる戴冲霄にあたる人物が、『抗倭図巻』では見当たらないように、両者の人物描写は全て一致しているわけではない。『胡梅林平倭図巻』に見られた張寰の揮毫と文章が『抗倭図巻』からはすべて消えてしまっているように、『抗倭図巻』は、張鑑のみた『胡梅林平倭図巻』の忠実な模本というわけではない。かつ、前述したように『抗倭図巻』には、弘治三年（一五五七）の年号がある。これは乍浦梁莊の戦いの翌年であり、これに従うならば、『抗倭図巻』の主題を乍浦梁莊の戦いに求めることはできない。両図巻は描かれた人物がそっくりであるにもかかわらず、主題が異なるということになる。逆に人物描写とい

う面では両図巻から遠い『倭寇図巻』は、弘治四年（一五五八）の年号をもち、主題としては胡宗憲による王直捕縛に象徴される倭寇鎮圧の物語という、『抗倭図巻』と同様なものを想定しうる。

『胡梅林平倭図巻』には胡宗憲と交遊のあった人物の手になる文章が付属しており、その意味で、他の二種よりも原・倭寇図巻に近いと考えられることを踏まえると、原・倭寇図巻の主題は、やはり乍浦梁莊の勝利に求められるだろう。本プロジェクトでは、二〇一二年一月、原・倭寇図巻の風景をたずねて、胡宗憲の徐海退治の舞台となった乍浦・梁莊・沈莊（いずれも浙江省嘉興市）を訪れた。この調査の成果ならびに胡宗憲の徐海退治の歴史的な経緯と倭寇図巻との関わりは山崎報告で述べられることになるが、なみなみと水をたたえた水路が無数に走る、江南デルタの豊かな水田風景は、王直捕縛の舞台となった舟山本島の岑港・定海港の景観と全く異なり、『倭寇図巻』・『抗倭図巻』に描かれる風景と重なるものがあるように感じられた。

推測になるが、江南の工房で模本が作られ、広まっていくなかで、倭寇図巻は、胡宗憲という個人を顕彰する戦勲図から、倭寇に対する明軍の勝利、そしてそれに伴う平和な暮らしの再来といったものを描く、より一般的な物語へと、絵巻の主題が展開変化していったものではなからうか。その過程で、本来の主題であった嘉靖丙辰の勝利―徐海退治の物語は後景に退き、絵巻の主題の設定年は嘉靖大倭寇の終焉をもたらした事件として語られた王直捕縛の年へと変化していったのではないだろうか。

いずれにしろ、『抗倭図巻』に引き続き、『胡梅林平倭図巻』なる三本目の倭寇図巻が存在したことが確認された以上、今後あらたに第四の倭寇図巻が出てくる可能性はある。本所所蔵『倭寇図巻』は、東アジアの孤本ではなくなったのである。

#### 四、北虜南倭の時代の戦勲図―平倭図巻と平倭図巻

ところで、前項でなにげなく「戦勲図」ということばを使ったが、これは馬雅貞氏の提唱された新しい概念である。馬氏によれば明代中期以降、官人たちの間で、宦蹟図の制作が盛んにおこなわれるようになる。宦蹟図とは個人の官吏としての経歴を描くもので、ここから派生して、官歴のなかの一部―たとえば科挙合格後の祝宴などを取り出して描く事例も生まれた。戦勲図もそのひとつとしてとらえられるもので、主として個人、それも文官の軍功の顕彰というかたちで、特定の合戦が描かれたものである。戦勲図の多くは、題跋が文集に伝わるのみで、現存作例は多くない。そのようななかで、馬氏が戦勲図の代表作例として挙げられるのが、中国国家博物館所蔵『平倭得勝図巻』である。

『平倭得勝図巻』が描く合戦の歴史的背景は朱敏報告で述べられることになるが、ここでもかいつまんで述べておくと、『平倭得勝図巻』が描くのは、陝西総督石茂華による万曆三十四年（一五七五―七六）の甘肅洮州の西羌族の平定である。すなわち時期は二〇年ほど下り、舞台は南の沿海部から西北の山間部に移るが、地方官のトップによる、明朝の安寧を脅かす騒乱の平定を顕彰しているという意味では、浙直総督胡宗憲による嘉靖三五年の江南の倭寇平定を描いた原・倭寇図巻と画題と作成背景に共通性があり、原・倭寇図巻から派生した『倭寇図巻』・『抗倭図巻』と比較検討し、それぞれの特質を照射していくための好素材と言える。本日三番目の報告である陳履生氏の報告ではこの点に留意しながら、『平倭得勝図巻』の美術的特質について語られる。

#### 五、さまざまな倭寇図の登場

一方、以上のような胡宗憲にかかわる物語とは別個に描かれた倭寇図

の存在も、この二年あまりの間に相次いで確認された。そのひとつが、中国国家博物館所蔵『太平抗倭図』であり、本図については、二〇一一年一〇月の国際研究会で陳履生氏により紹介された。『太平抗倭図』は、太平の町に倭寇が襲来、民衆は投石して抵抗し、明軍は鉄砲を持って駆け付け、関帝廟からは関羽が出陣、倭寇は無事撃退されたという内容を、約二メートル四方の画面いっぱい描くものである。太平は現・浙江省台州市温嶺市、後期倭寇の多発地帯に位置する。本図に特徴的なのは、『倭寇図巻』などでは全く描かれていない、女性の掠奪のシーンが多数描かれていることである。史書にみられる倭寇の悪行が生々しく表現されている。倭寇たちは、一様に扇と日本刀を手にしており、この二つが、倭寇を示す記号として使われていることがうかがえる。本プロジェクトでは、二〇一二年一月、太平の町を実際に訪れ、この図に描かれている風景を色濃く残す太平県城の現地調査を行なった。

『太平抗倭図』は紙本着色の絵であるが、版画の倭寇図の存在も明らかとなった。二〇一一年二月に馬雅貞氏が紹介された『三省備辺図記』という版本には、「崇武擒倭寇図」「永寧破倭寇図」「安海平倭寇図」「練兵平倭寇図」「平倭寇欽賞図」と、五つもの倭寇鎮圧関係図が収録されている。<sup>(8)</sup>『三省備辺図記』とは、明代後期の官僚蘇愚が自ら作らせたもので、一五六七―一六九九年福建の倭寇・海寇鎮圧、一五七二―一七三三年広東の山寇鎮圧、一五七四年広東の潮寇鎮圧、一五七九―一八一貴州の苗族反乱等の鎮圧という彼の功績を、図と文章で描いたもので、これも戦勲図の範疇に入れられる。これらの図には、捕えられて引き据えられる倭寇たち、明軍に追いつめられる倭寇たちの姿が示されている。倭寇たちはみな、月代を剃り裸足で日本刀や長弓を持つ姿で表現され、倭寇が逃げ去った後には日本刀が散乱する。

馬氏の紹介されたところによると、明末には倭寇退治をテーマにした

小説が多く書かれ、そうした小説には挿絵もあった。『威南塘剿平倭寇志伝』は、倭寇退治の武將として著名な威繼光の活躍を描く、作者不詳の小説である。<sup>(9)</sup>全体像は不明で、現在第一巻の途中から第三巻までが伝わっているという。ここに挿絵として描かれる倭寇たちは、やはりみな月代を剃り、日本刀を持っている。日本刀を二本持つ者もいるが、二刀流の倭寇は、『倭寇図巻』にもみられる。

現状、本プロジェクトでは、倭寇退治の小説の展開までは追えていない。だが、こうした挿絵付の倭寇小説の流行は、胡宗憲個人の戦勲図として描かれた原・倭寇図巻から、『抗倭図巻』『倭寇図巻』のような、倭寇に対する明軍の勝利という、より一般的な物語を描く作品を派生させ、受容していく社会的背景を解くうえで重要な位置を占めており、今後追究していかなければならない課題として残されている。

#### 〔注〕

- (1) 以上一、二の検討内容については、拙稿「倭寇図巻再考」(『東京大学史料編纂所紀要』二二、二〇一二年)・「史料紹介・倭寇図巻」(『日本史の研究』二三四、二〇一一年)参照。
- (2) 馬雅貞「戦勲と宦蹟―明代の戦争図像と官員の視覚文化―」。中国語版は「戦勲與宦蹟・明代戦争相関図像與官員視覚文化」(『明代研究』第一期、二〇一一年)。以下馬氏の研究に言及する際はすべてこれによる。
- (3) 張鑑『冬青館甲集』(『続修四庫全書』)所収。訳注は山崎岳「張鑑」『文徵明画平倭図記』の基礎的考証および訳注」(『東京大学史料編纂所紀要』二三、二〇一三年)参照。
- (4) 胡宗憲幕下の鄭若曾の執筆になる日本研究書兼倭寇対策書。
- (5) 『張通參集』(『盛明百家詩』五八(国立公文書館内閣文庫所蔵)所収)。
- (6) 『張通參集』所収。
- (7) なお二〇一三年七月の調査で、山東博物館に『平番得勝図巻』から派

生したと考えられる図が所蔵されていることが判明した。従来、壬辰倭乱時における兵部尚書邢玠の戦功図とみなされてきたものである。倭寇図巻と同様、『平番得勝図巻』も模本が複数作られていた可能性を示唆し興味深い。

(8) 『北京図書館古籍珍本叢刊』二二所収。

(9) 古本小説集成編輯委員会編『威南塘剿平倭寇志伝』上海古籍出版社、一九九〇年。

〔付記〕 本稿は、「倭寇図巻研究の現在」(『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』五九、二〇一二年一〇月)に、二〇一二年一月の現地調査の成果等に加え、国際研究集会の趣旨に合わせて加筆・再構成したものである。